

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

1

次の資料A、資料Bを読んで、あとの問題に答えなさい。

(丸で囲んだ数字が付いている言葉には、それぞれ資料のあとに〔注〕があります。)

資料A

翻訳者として大切なのは、「こだわりを捨てて読み、こだわりをもつて訳す」姿勢ではないかと思う。

こだわりを捨てて読むとは、とりあえず自分の考えにかかわらず、書いてあることをまっすぐに聞くとのことである。たとえば、原子力発電に賛成する人がある科学記事を読む場合と、原子力発電に反対する人が同じ記事を読む場合とをくらべたら、おのずと読んだあとの感想はちがってくる。しかし翻訳者は、このような読み方をするべきではない。翻訳者はあくまで原著者の思いをまっすぐに受けとめなければならぬ。

じつはこの姿勢は、コミュニケーションのなかで養われる。相手のいうことを批判しながら聞いたり、偏見をもって聞いたりするのはなく、まずは相手のいうことをそのまま聞く。湖の水面に小石を投げるとしずかに波紋が広がっていく。湖が自分で、小石が話している人だと思っ

てほしい。湖面は小石の投げられ方を正確に反映する。

こだわりを捨てて読めたら、次はこだわりをもって訳さなければならぬ。わたしのこだわりは、翻訳した文書も、うつくしく流れるよう

な日本語でありたいというものだ。読者に翻訳した文章だとわすれてもらえたら、それがいちばん。むかしから、翻訳のうまい下手は日本語の力のせいか、外国語の力のせいか、という議論がある。わたしの答えは「翻訳の力はすぐれた日本語力に負っている。外国語力は翻訳の前提にあるべきで、あらためて問われる必要はない」だ。だから、翻訳をやりたいなあと思っている人は、ゆめゆめわすれないでほしい。日本語の力をつけることを。

異文化のなかで書かれたものを、原文に忠実でありながら流れるような日本語にする。そのために必要なのは、言葉をたくさん知ることだと思う。要は語彙力(ボキャブラリー)が豊富であることだ。それにはなんといっても、多読が大切だ。あるいは自分の好きな作品を徹底的に精読することだろう。学校の古典の授業もばかにしてはいけない。③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

わたしの高校のときの古典の先生は泣く子もだまる先生で、古典をとんでもなくたくさん読まされた。この経験はいまになって、おおいに役立っている。

また、翻訳力リサーチカともいえる面がある。とくにノンフィクションの本を訳しおえたときは、該当ジャンルの一端の知恵がついている。知的好奇心の旺盛な人にはたまらないはずだ。

リサーチをするときにもっとも気をつけるべきことは、もとの資料や情報にあたるということだ。こうしたものを「第一次資料」というが、世の中には「第二次資料」「第三次資料」があふれているから、安易に

それにとびついてはいけない。第一次資料をさがすのは楽ではないが、翻訳書が信頼にたたるためには、どうしても必要なことである。

いまはインターネットでどんな情報もひいてこられるけれど、それだけに「第一次資料」がわかりにくくなっていくから注意しなければならぬ。中学生・高校生のときから、わからないこと・疑問に思ったことは、すぐに調べるくせをつけておくとういと思う。なにが本当の情報かを見わかるのに特效薬はないから、若いうちからなんでも興味をもつて、つきつめていくしかないだろう。

(たかおまゆみ「わたしは目で話します

——文字盤で伝える難病ALSのこと　そして言葉の力」による)

〔注〕

- ① ゆめゆめ……決して
- ② 精読……内容をよく考えながら細かいところまで読むこと。
- ③ 連綿……長く続いて絶えることのないさま。
- ④ 旺盛……さかんなこと。

資料B

ネット社会の隆盛が本の市場にあたえた影響は少なくありません。本がかつてほど売れなくなったのは、明らかにネットの普及にあります。しかし、私はこの流れがそのまま続くとは思いません。再び本が見直される時代がくると見ているのです。

コンピュータはビッグデータなど情報を整理するスピードに関しては非常に優れていますが、その情報の真偽など質を見極めることはできません。

一つひとつの情報が、どこの誰が責任をもって発しているのかが見えないがゆえに、いい加減な情報で溢れかえってしまう。

誰が発信しているのかは、とても重要なことです。たとえば、「東京都によれば」といえば、知事なのか、都の何課の職員なのか、誰がいったのかということになります。情報の信頼性を最低限^⑤担保するものとして、どこの誰がいつているのかがわからなければ、信じるに値しない情報ということになります。

その点、ネットと比べて、本は発信する人が誰なのかがはっきりとわかります。たとえ極端な意見であっても、読み手はこの人が責任をもって書いているんだと安心して読み進められます。

書き手の氏名がきちんと入っていることは、これからの時代、強みではないでしょうか。

ネットはこれまでは光の部分ばかりにスポットライトが当てられて

きましたが、信賴性の欠落という影の部分が、これからいろいろな問題を伴ってクローズアップされていくように思います。

同じことでも、本を通して知ることと、ネットを通して知ることとは違います。

たとえば、新大陸を発見したクリストファー・コロンブス（1451ころ〜1506年）についてネットで数行で紹介されているものを目を通すのと、コロンブス個人や大航海の背景にある当時のヨーロッパの地政学について記述した関連書物を読むのでは、同じ「知る」でも、その意味合いがかなり違います。

ネットで検索すれば、簡単に知ることができます。しかし、そこで得られるのは単なる情報にすぎません。細切れの断片的な情報をいくらかたくさん持っていて、それは知識とは呼べません。

なぜなら情報は「考える」作業を経ないと、知識にならないからです。考えることによって、さまざまな情報が有機的に結合し、知識になるのです。読書で得たものが知識になるのは、本を読む行為が往々にして「考える」ことを伴うものだからです。

何かについて本当に「知る」ということは、少なくとも知識というレベルにまで深まっていなければならないと思います。

（丹羽宇一郎「死ぬほど読書」による）

〔注〕

⑤ 担保する……おぎなう。保証する。

⑥ 大航海……十五世紀から十七世紀にかけて、ヨーロッパ人が新航路を開いたこと。

⑦ 地政学……政治と地理的条件との関連を研究する学問。

⑧ 有機的……多くの部分が集まり強く結びついておたがいに関連し合いながら全体を形作っているさま。

⑨ 往々にして……しばしば。

〔問題1〕

資料A

に、翻訳の力はすぐれた日本語力に負っている。とありますが、筆者がこのように述べる理由を百字以内で説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や。や「」なども字数に数えなさい。

〔問題2〕

資料B

で、本当に「知る」とありますが、それはどのようなことだと筆者は考えていますか。百字以内で説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や。や「」なども字数に数えなさい。

〔問題3〕

資料B

の信頼性の欠落の例を一つあげ、なぜ信頼性が欠落してしまうのかその理由を説明しなさい。その上で、その信頼性を高めるためにはどうしたらよいか、

資料A

資料B

の内容をふまえて、あなたの考えを四百字以上四百五十文字以内で書きなさい。

ただし、書き出しや改行などの空らん、記号（、や。や「」なども字数に数えなさい。